

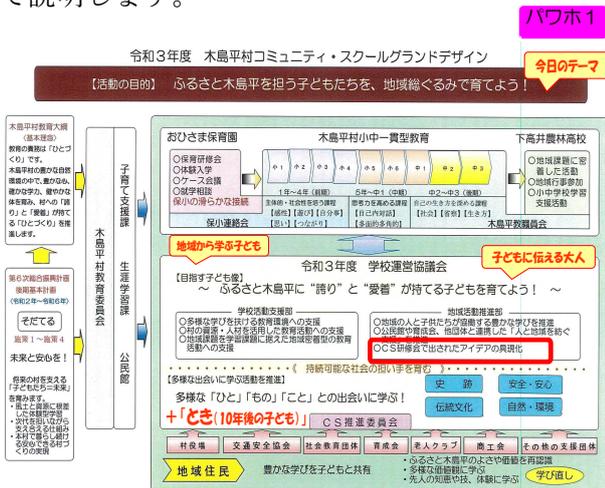
第10回コミュニティ・スクール研修会 in 木島平

コーディネーター 岸裕 司さん (文部科学省コミュニティ・スクールマイスター)
 パネリスト 小国 喜弘さん (東京大学大学院教授)
 日墓 正博さん (木島平村村長)
 莉和 亮さん (木島平村集落支援員)

◇パネルディスカッションテーマ

「ふるさと木島平を担う子どもたちを地域ぐるみで育てよう」90分間

岸…スライドで今日の流れの主旨、進行について説明します。



パワホ1

パワホ2

第2部 パネルディスカッション ZOOM 10:20~11:35(75分)

- ・小国喜弘さん(東大大学院教授Zoom参加)
- ・日墓正博村長
- ・莉和 亮さん(集落支援員)
- ・コーディネーター岸 裕司(文科省CSマイスター・Zoom参加)

本村では総務省所轄のまちづくり役の「集落支援員」を設置している

以下は「木島平村集落支援員設置要綱」より

第2条 支援員は、村との連携を密にし、次に掲げる活動を行う。

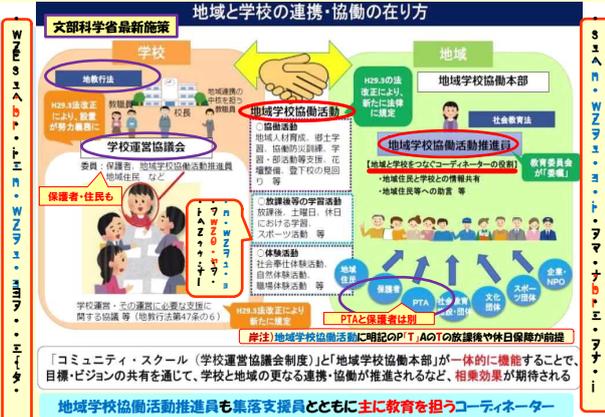
- (1)地域の巡回、点検及び課題整理に関する活動
- (2)地域と関係機関の連絡調整に関する活動
- (3)地域の産業振興に関する活動
- (4)地域におけるコミュニティ活動及び住民との協働推進に関する活動
- (5)地域間交流及び移住・定住促進に関する活動
- (6)その他地域の維持及び活性化のために村長が必要と認めた活動

⇒パネラーのおひとりに集落支援員の莉和 亮さんがおられます
 ⇒莉和さんを設置した日墓正博村長の施策意図もお聞かせしたい
 ⇒小国喜弘さんにはご助言を自由にいただきたい

2

パワホ3

国の最新施策はコミュニティ・スクール(CS)と地域学校協働活動の両輪推進



岸… 左のパワホ1の画面を見てください。令和3年度のコミュニティ・スクールのグランドデザインがあります。学校運営協議会で目指す子ども像が書かれています。子どもたちは大人から学ぶ、大人たちは子どもに伝えていくということになっています。

コミュニティ・スクールで出されたアイデアを具現化するということが書かれていますので、パネラーの皆様は具現できることをイメージしてご発言していただきたいと思います。

グランドデザインには、多様な出会いに学ぶ活動を推進、持続可能な社会の担い手を育てるとして、多様な「ひと・もの・こと」との出会いに学ぶというのがあります。私はそこに、「とき」という概念、10年後をイメージしながら、「ひと・もの・こと」に「とき」という概念を加えて4要素で常に考えて活動していくことが大事だと思います。

先ほど、地域で担う子どもたちを地域で育てようというときに、子どもたちがいずれ助ける側にまわってもらいたいという言葉がありました。やはり“とき”の概念を考えているからです。

次にパワホ2の画面を見てください。今日のパネルディスカッションの3人の中に、集落支援員の莉和さんがいらっしゃいます。少し調べましたら集落支援員は、総務省所轄のまちづくり役であるわけです。木島平村も集落支援員設置要綱を作っていて、取り組みが6つあります。

しかし、集落支援員の制度の中には、教育のことがまったく単語として触れられていないんです。私が文科省のCSマイスターとして現在推進している施策、国の施策がこれなんです。(パワホ3) ここにあるように、左側にコミュニティ・スクール、右側に社会教育法が改定されて、地域学校協働活動と地域学校協働活動推進員ということが位置付けられています。それを教育委員会が設置するというようになっています。まだ木島平村は地域学校協働活動推進員は設置されていませんが、長野県下では既に500人

ほど委嘱されているんです。ですから、今後は集落支援員と共に両輪になっていただければと思います。

このようなことを知っていただき、これから討論を始めていきたいと思います。まずは、自己紹介と実践発表の感想を一人5分程度でお願いします。

小国…木島平村には、もう10年ほどになりますが木島平小学校、中学校に行かせていただき、授業改善のお手伝いをさせていただいています。今回は村に伺えなくて残念ですが、それぞれの実践発表を見させていただきましたので、作成したパワーポイントに沿って感想を述べたいと思います。緊急事態宣言の中でどのような取り組みがされているかという視点からも拝見させていただきました。

木島平小学校の「私たちのお米づくり」では、

地域に居る米づくりの達人から教わっていることが素晴らしい。その中で、自分の成長を支えてくれる大人たちがたくさんいることを知る。このような活動が木島平小学校を表している象徴であると思う。地域の中に学ぶべき文化がたくさんあることを知るきっかけになっている。

これは先生方には怒られてしまうかもしれないけれど、もしかしたら、子どもたちが各集落毎に分かれて、子どもたちの米作りの活動ができたなら地域の大人をもっと知ることができるのではないかと、発展の可能性を感じました。

子ども若者白書によると、相談できる人がいるということと、相談できる人の数が多ければ多いほど、自己肯定感やチャレンジ精神が高まったり満足度も高まる。将来への希望が高まったりするという分析が出ています。困ったときに助けてくれる人と出会えないという状況（社会の）中で非常に重要な取り組みだと感じた。

「中学生未来塾の発表」では、様々な人たちと夢中になってチャレンジできることが大事にされている。これは学校の学びとは対照的で、学校の学びでは教室の中で同学年がある程度決まっている内容を学ぶが、この学びはそれと逆である。このことが素晴らしいと思いました。よく知っていることを学び直したり、自分たちが発見できていない魅力がたくさんあるのではないかという省察的な学びにつながっている。教科学習ではできない学びがフォーカスされている。これは木島平未来塾という総合的な学習がカリキュラムとして定着させているからこそ、継続と改善ができています。

去年は村議会にも提言されたということで、市民教育としての参画が（要素に）組み込まれている。探究の学びがあり、市民学習がここで行われている。行政への参画もそのなかに位置付けられていることが素晴らしい。

下高井農林高校の発表では、観光化のプロジェクトということで、観光を考えていくと他地域と似てきてしまうということを抱えながら、具体的に中学生との連携やツアーガイドを高校生がやることで、“かけがえ”のなさ（が生まれる）。素晴らしいと思うことは学びの利他性が意識されていることである。本来学ぶということは、誰かの役に立ちたいということが大事なことで、学びの利他性というものが意識されているし、観光というものを媒介とすることで中学生との学びや人との関係が結び直されていると感じた。

「地域見守り隊」の発表では、地域のコミュニティを編み直すこと、挨拶がきっかけで様々な会話がされること、いろいろな大人が見守っていてくれると安心して通える。見守る側は、生きる糧を得られる。よりよく知る、大人にとっても学びになるということが意識されている。Duty（義務）からコミュニティ活動に発展していく可能性がある実践だと感じた。

岸…すべての実践発表に対して丁寧な発表をありがとうございました。それは村長さんからご意見をお願いします。

日臺…今回は、会場参加者をしぼっての開催となった。中学生も一緒に参加し、高校生が村のことを学び、村のことを紹介する高校生の活動から、村の施設をもう少しにぎやかにするために、いろいろな取り組みをしている。ある程度の長い時間をかけて、小中高と連携をしながらやっていくのは素晴らしいことだと感じる。

今回が第1回目のツアーだった。子どもたちがいろいろな計画をしてくれることを期待した。集落支援員については、資料のとおりである。その他にも何人か活動している。お年寄りの健康体操をしたり、地域のコミュニティづくりを兼ねての移住定住担当者がいたり、また、今年から、地域と高校を結ぶとして農林高校の活動と地域を結ぶ地域支援員を配置したりしている。

苺和…木島平村に来て一年足らずの生活になります。あまり地域のことが見えていないというのが現状です。お祭りや地域の集まりができないことは残念ではあるが、今回の活動を拝見し、小学校では米作り、稲作をテーマとしている。

それが中学になると、もう少し広いエリアに、課題を自分たちで探して、地域の人や身近なお兄さんお姉さんとかかわっていく。そして高校生になると、さらに広いエリアになって、発展させて技術を伝えていく。今回のツアーのように「伝えることと伝わること」は大人でも難しいが、それを高校生のうちに実践できるということは素晴らしいことだと思います。歴史を伝えていく活動であると感じました。

岸… 莉和さんは、シティホテルの敏腕営業マンだったと聞いています。総務省の施策での集落支援員の設置には、移住者を地域に受け入れる仲介役という活動があります。莉和さん自身が移住者なんですね。先ほど、コロナ禍で活動が見えないというお話をされましたが、莉和さんは移住されて2年ですか？

莉和… 1年です。

岸… そうすると活動の実態がまだ見えていない中で実践発表を見ていただいている。私と小国さんは10年間かかわっている。そういう意味では、莉和さんは新鮮な目で参加してくださっているので、遠慮せず、村にはこういうところが足りないんだとか、産業振興にはもっとこういうところに力を入れていきたいとかの意見をいただきたい。

莉和… 栄村で育ち、東京でホテルに就職しました。ホテルでは主に8割くらいが外国人でした。ホテルでの会話というのはある程度パターンが決まっていますが、外国人の方は長期出張の方が多いので、日常会話に難しさを感じましたので、ニュージーランドに2年間行き、また戻ってきたということです。

移住ということ言うと、やはり結構観光とつながっていると感じています。やはり旅行に行きたい場所は、住みたい場所。行ってみたい地だと思います。移住を考える世代は、だいたい40代、子どもができて、子育てをしながら移住したいということを考えています。

そういうときに、知らない土地はなかなか選択肢に上がらない。やはり若いときにアルバイトをしたとか、旅行に行ったとかが移住のきっかけになっているという話を聞きました。

私自身が移住者として思ったことは、親の生活は自分たちでなんとかかなるけれど、一番心配なのは子どもの環境です。木島平中学校、小学校に子どもがいますが、転校してきたとき（最初）非常に心配しました。コロナ禍でもあり、なかなか登校できず友達ができるか不安に思っ

ていましたが、木島平の子どもたちは素直で、すぐにうち解けて、友達ができました。登校が始まると、子どもが「〇〇君に誘われた」「〇〇君と遊んだ」と言うようになりました。低学年から高学年まで一貫して活動していること、中学生から高校生までのお兄さんお姉さんに、地域の活動で教えてもらうことが根付いてきていると思いました。

地域見守り隊に関して、子どもたちから見ても嬉しくて安心できるもの（だと思った）。私も小学生の頃、登下校のときにおじいちゃんおばあちゃんが挨拶してくれたことを思い出しました。声をかけてくれる高齢者とのふれあいがありました。挨拶すると返っていることは気持ちのいいことです。ここ木島平は皆さんが挨拶してくれるんです。高校生が暗い夜道を歩いていて、反対側から声をかけたら不審がられるかと思ったいたら向こうから元気に挨拶してくれました。挨拶が根付いている（と感じた）。

岸… 木島平村にまた行ってみたいということをお話していただきました。宮崎県の綾町、社会教育が充実しているのです。「おばあちゃんのおしんこを文化祭で出してくれ」と言って「えっこんなもの」「実はおばあちゃんのおしんこを食べたい人がいるんだ」ということで、日常的に何かやっていることを文化祭で出すようになったんです。ある年は70万人も観光客が来るようになったそうです。村を出た人を含めて「あの人の顔が見たい」という価値が非常に大きい取り組みのように感じています。

0歳から18歳まで（子どもたちを）村全体で育てていく社会資本（ソーシャルキャピタル）に、安心・安全がくっついてくると感じます。

岸… コロナ禍であっても歓迎できることとして、国ではGIGAスクールの予算をつけるようになりました。農村交流館にでも使えるようにというお話があったが、若い子たちはスマホ、ITに抵抗がないので、産業振興の発信とかにつながっていくのではないかと思います。それらを含めて日墓村長からお話をお願いしたい。

日墓… 今は子どもたち大変だと思う。自分たちが子どもだった頃にはそんなものが全くない時代ですから、学校が終われば野山や川に行って遊ぶ。ときには、家の農作業を手伝う。そんな中で自然と自然と触れ合ったり、村の農産物と触れ合ったりする機会があった。なかなか今はそういう機会がない。逆に、技術が進歩するにしたがって、昔なかったもの、今覚えなくては

いけないものが非常に増えてきていると感じます。小学校で英語やプログラミングなどの使い方を、しっかり学んで使いこなしていかなければならない。それが世の中の常識になっている。

私たちは、かつて家の手伝いをするのが常識だったが、今はそれよりもICTの時代に対応できる子どもたちが、大人になるということが当たり前になってきている。そのことが子どもたちに課せられたことで大変だと思う。

しかし、そうは言っても地域のものに触れることも、人として成長していく上で重要なことで、保育園から小中高校と、地域に入っても、人と人とのかかわりがしっかりとできる大人にならないといけないと思います。

木島平は農村です。地域と子どもたちのかかわり合いができやすい、やりやすいというメリットがあります。子どもたちが気軽に挨拶をするとか、すぐにうち解けるということなどは、人とのかかわり、地域とのかかわりができているからで、子どもたちもつながっていると感じます。是非、将来につなげていきたい。

移住定住という話では、移住定住面で、子どもたちの教育を含めた子育て環境は大きなキーポイントになると思っています。どうしても学力だけを求めていくと、地方は不足することがあります。学校だけでそれを補うのは難しい部分もあるので、それを補っていく。地域で高めていかなければならないと思っています。コロナ禍で地域の行き来ができない状況ではありますが、人間的コミュニティ、そういう地域でなければと思っています。

コロナ禍ではありますが、村には四季を通して、田舎暮らしを体験できる施設があります。SNSなどで情報発信し、そういうものをしっかり発信していかなければいけない。そういうものを活用して発信していく必要があると思います。それをしっかり支える地域（見守りたいを含め）であるということも発信できればいいと思っています。

岸…村長さんの話にもありましたが、今の子どもたちは大変だということで、学力には“見える学力と見えない学力”があるわけです。特に保護者に知っていただきたいのは、小国さんが相談できる人が多い子どもほど自己肯定感とチャレンジ精神が高いというデータを示してくれました。それと全く同じデータが、経団連が学校卒業後、どういう基準で大卒を採用したかの理由を、毎年20項目あげています。僕がそれを知

ってから、そのベスト5がここ15年くらい変わっていないんです。第1位がコミュニケーション能力、第2位が自己肯定感、それからチャレンジ精神なんです。私たちはそれを見えない学力と呼んでいます。では、どういう環境で育つかといいますと、木島平のような小さいときから多様な人間と触れ合うこと、多様な体験をすること、このことに尽きるんです。学校教育にうろうろしないでいただき、もう少し全的な人間を育てていくことが望まれる。

社会的親と私的親という言葉があります。最近私的親が多くなってきているんです。我が子のことしか考えない。隣の子を守る人もいないと我が子も守れないんです。隣の子も血縁がない子どもも心配する人を社会的親というです。知らないうちに、木島平は活動を通して社会的親が増えているんだと、私は感じています。

是非、自信を持っていただきサステナブルのように活動をつなげていっていただきたい。

小国…内閣府が作った子ども若者白書にはさらに面白いデータがあります。小学生、中学生、高校生ぐらいの年齢層を表していますが、2016年～19年、40～46%、半数以上の子どもが自己肯定感を持ってない。将来への希望も4割ぐらいの子どもは持っていない。ところが一番高いのは社会貢献意欲で70%の子どもは社会貢献意欲を持っている。しかし。ある意味深刻だと思うのは、何らかの役に立ちたいと思っている子が70%（たくさん）いるのに、自己肯定感50%に満たないことです。役に立ちたいと思っているのに、役に立っているという実感もてる場面も用意されていない子どもが多いのかな？と思っています。

居場所ということでは、悲しいことに「自分の部屋」という回答が多くて、学校が一番低いんです。これをどう見るかです。どこにも居場所がない子が、5.4%いること、さらに家庭・学校・地域で、居場所がどのくらいあるかというと、家庭に居場所がない子が20%、助けてくれる人が居ない子は22%、相談できる人がいない子はもっと増えているんです。

地域が居場所になっている人は少ない。地域に助けてくれる人がいると答えた子は27%くらい。相談できると答えた子は18%なんです。学校よりもはるかに地域が希薄な場になっていることが分かります。ある意味、ここにフォーカスした教育をどういうふうに行うのか、現在、木島平で保育園から高校までかけて挑戦してい

ることだと、改めて思いました。

村長さんが言われたように、ここに手を入れるということになったら、社会教育として地域を中心にいろいろ催しをしたら、成果が出るのかとしたりなかなかそうならない時代になっていない。学校を媒介にしないと、地域の人と出会えないとか、地域に安心できる場所があることを知ることができないようになっている。

見守り隊の活動は、それがなくて単に地域の人と小学生が会って、知らない相手が、不審者なのか親切な人なのか見分けがつかないけれど見守っている。このことは、都会では深刻な問題になっています。警察の不審者情報をアプリで調べたら、都会では不審情報として地域住民に発信されているんです。

安全見守り隊があるからこそ、安全に出会え、それがきっかけとなっていろんな会話ができる。地域に相談できる人が居るということが実感できる。こういうのがおそらく子どもたちにとって安心できる。居場所の数と自己認識、居場所の数が多ければ多いほど、自己肯定感やチャレンジ精神、将来への希望が高まっていく状況にあると思うのです。

この先、学力との関係が考えますと、学校教育が全国的にやっていることが、ある意味おかしなことになっている気がします。どういうことかという、結局、昔の予備校みたいになってしまっているからです。テストなるべく多くして、やるべき宿題を多くして、そのことによってテスト学力をあげて勝ち抜けさせるみたいになっている。岸さんが言われるように、学力をつけてもコミュニケーション能力はつかない。若しくはコミュニケーション能力を付けないでいるからこそ、勉強に打ち込み点数をあげるという構造になっている。

先ほど、社会貢献意欲の話をしていただきました。本来医者になりたいというのは、金持ちになりたいということではなくて、困っている人を助けたいという利他的な精神に支えられている。荻和さんがホテルマンになりたいと思われたのも、ホテルに勤めて社会貢献したいという思いがあったからだと思います。だからニュージーランドに自費で2年間も行かれて自己研鑽を積まれた。これは荻和さんの学びなんです。こういう学びは本来の学びです。それこそ木島平村の中での困りごと、困っている人と出会ったり、人々がもっと元気になるかを考えたり、そういうことの中に自分の将来像を見たり、取り

戻されたりして見えてくる。そして、じゃあこの仕事につく必要があるんだということで、進学行動につながっていく。

今の受験競争というのは、かつては200万人いましたが、今の同世代人口は、100万人を切るくらいになっています。受験競争は緩和されてきている状況です。今は社会貢献意欲をしっかりと耕して、その中に学習へのモチベーションを高めていくということが大事なんです。

現在、非常に強いドライブになっていく社会になっているにもかかわらず、短期的に成果をはかるようになってきている時代の構造があります。

その中で、学校も非常に全国的に追い立てられ、学力テストをあげるためにはテストを増やせみたいになっている。そういう中で、今日見せていただいた実践にはアンチテーゼがある。本当に安心して子育てができる村、教育づくりを改めて考えさせられる発表だった思いました。**岸…**地域の課題は地域の人でしか解決できないし、緩和できないんです。カリキュラムや学習指導要領は文部科学省が内容を示しています。その一方で、地域課題をカリキュラムに入れたり、カリキュラムを変えたりできるのは、まさにコミュニティ・スクールなんです。

木島平村は初めから法定提言のコミュニティスクールですから、CS委員の方々は、例えば、校長先生が毎年、学校運営方針をこうしたい。そのことに対して、CSの委員は承認しなければいけないんです。そういう法律の権限があるわけです。これが一番すごいんです。明治5年に学校教育制度ができてから134年間は、何を言われてもそれを変えられなかったんです。

CSの法律ができたことで、唯一承認しなければならなくなったんです。承認できないときは書き直さなければならぬんです。法律の書き直しの内容には、“教育課題を解決すること”が盛り込まれているんです。木島平村のコミュニティ・スクールは10年になりますが、CS委員の方々に、そのあたりを校長先生と議論したことがありますか？渡辺会長さんに聞いてみたいです。

現在、法律に則ったコミュニティ・スクールは幼稚園から高校まで、全国に1万校くらいあります。現在は努力義務なんですけど、来年は法律の改正期で、設置が義務化される可能性があります。なぜかという、昨年12月に自民党内にコミュニティ・スクール推進連盟というの

ができたんです。その中にコミュニティ・スクールの価値と地域学校支援活動の価値をもっと広げていくと明記されているんです。ひょっとすると義務化ということになるかもしれません。とするならば荊和さんがいたニュージーランドなどは権限がすごいんです。もっといっばい法律があって、例えば中学生が委員になれるとか、最低5人は他民族とのバランスをとるとか、日本もいずれそうなるだろうと思います。

だから一方で、校長先生方はマネジメント力をもっとつけていく必要があります。カリキュラムのなかに地域課題をもっと入れてほしいと、渡辺会長さんはいかがでしょう。

渡辺会長…毎月1回CS推進委員会をやっています。学校運営協議会に提案する前に、そこで意見交換をして、意見を取り入れてもらっている。村民の皆さんがどう思っているかはわからないが、直接学校に話すのはうまくいかないから、学校運営協議会がそのクッション役になれば、お互いがよくなるんじゃないかと思っている。

岸…長野県下では、最近ずいぶん信州型から法定CSに変えたいという依頼があります。かなりの町村からそういった希望が出ています。先行してやってきている木島平村が全国的にもリーダーシップになれる取り組みをしていますから、“おらが村の”という方向で、それが次代を担う子どもたちが、実際10年たったらこんな子どもに育っているのだというデータも今後出てくるといいと思います。

岸…他の方で意見がある方はいますか。中村先生から栄村と飯山市に広げていきたいというお話がありましたが、通学エリアになっているんですか。そうであれば農林高校が中核になって、互いに住民同士が価値を高め合っていくという中核になる方向だと思います。もうすでに考えていると思いますが、全国的にみると高校の統廃合がものすごい勢いで進んでいます。町村立でないから権限がない、であるがゆえに“存続させるんだ”という強い意志をもってずっと農林高校を支えている、この価値はものすごく高いものがあります。全国的にも、高校が地域や中学校と一緒にやっていくところは見当たらないです。

農林高校中村…一つ目には、地域ということをテーマに教育活動を展開するときに、地域というものは広くとらえていく必要があります。そういう中で地域を広く課題解決の場としたときに、下高井農林高校の果たす役割は非常に大き

なものがあると思います。存続という話になってくると非常に難しい問題ではあるが、地域の農林高校、村立の高校、地域唯一の専門高校が地域にとって学ぶ拠点として、地域を巻き込んだ形での発信元になっていく。そういう形での存在意義を今後果たしていければ、子どもたちも伸びるだろうし、地域から学ぶことも多いだろうと思う。継続していくということの必要性を感じている。発信源になれるような高校の存在になっていくことを常に思っています。

岸…今後も応援していきたいと思っています。最後になりますが11時35分まで、あと20分あります。それで今度は日墓村長からの意見で進めたいと思います。

中村先生の発言の最後に、今後はお年寄りとの交流を大事にしていきたいとの話がありました。そのことについて日墓村長、荊和さん、そこに触れてお話いただけるとありがたいです。

日墓…全国的にも高校の統廃合が進んでいる。長野県の場合は地域の考え方を、協議会を通じて意見をまとめるという形で進めている。村は、飯山市、野沢温泉村、栄村を含めた第1通学区となっていて、飯山高校と下高井農林高校とがある。地域とすれば、当然、普通高校と専門高校の両方があることによって、地域の将来にもつながるということで存続を希望しています。先ほど、木島平村の魅力を発見し、それを発信していくという発表がありました。

地域とすれば、下高井農林高校の姿を通して、下高井農林高校の魅力づくりにつなげていきたい。下高井農林高校を選んで学ぶ子どもたちを増やしていきたい。そんな取り組みをしている。

下高井農林高校の魅力づくり部会というのがあり、そこには学校関係者だけでなく、農業、林業、建設業、介護だったり、そういった皆さんが集まって、どうやって下高井農林高校の魅力を高めていけばいいかを話したり、提案をしたりしています。下高井農林高校と地域をつなぐ集落支援員を配置したこともその一環になるわけです。

下高井農林高校の地域への定着率と貢献は本当に高いです。直に農業や林業関係で就職することは少ないが、この地域にはいろいろな産業があるわけですが、大体7割ぐらいの子どもが、一旦、外の専門学校や大学に行ったりする子どももいますが、将来的に地域に戻ってきて地域で仕事をみつけて定着する。下高井農林高校がこの地域の将来にかかわっている高校であると

認識しています。高校生が頑張る。その頑張りを地域が外に向けて発信し、その魅力を高めていくことを考えています。

下高井農林高校の先生方が地域とのかかわりを深めている。発表にあったように様々な活動をしていただいている。課題を発見し、地域の魅力を高め、そして発信していることはとても素晴らしいことだと実感しています。その成果を多くの皆さんに知っていただくというのが私たちの役割でもあり、支援していただくだけでなく一緒にやっていくというふうに考えています。

これは、下高井農林高校だけでなく、飯山高校についても同じで魅力づくりも進めていく。子どもたちは将来地域を担う人材です。そのためには、長い時間をかけて、子どもたちが、将来地域を担っていくためにはどうすればよいのか。そのために、高校を残していくという体制をしっかりとらなければならないことを考えて、進めています。

その中でいろいろ発展もあります。手打ちそばについては、村の手打ちそばの方が指導していて5年くらい経ちますが、全国規模の大会でも賞をとっています。また、飯山市の瑞穂地区で地域の資源活用ということで、そば作りを通じて地域とのかかわりも生まれている。飯山市の小沼ほうきは、昔は手作りのほうきが有名だったが、その技術が途絶えようとしていたのを、再建しようとしている。それが、地域の観光資源にもつながっていく可能性があると思われる。

自分たちが気づかない資源があるのではないか。高校生が見つけたものが、ただ単に高校生のフィールドだけでなく、地域の経済の発展につながっていく資源になっていければ、名実ともに地域の活性化を担う人材になって行くと期待をしている。

岸…長野県の県立高校で唯一、一校が法定CSになったところがあります。県でも方向転換が始まっているようです。僕は、農林高校は是非、農林高校の先生方と近隣の村が、県教委に要望して、“下高井農林高校を法定CS2号にしてくれ”と行ってもいいと思います。そうすると、継続を担保できるんです。これもCSが法律ということのよさなんです。

そのあたりを考えてもらうものいい時期だと思います。

苅和…農林高校のお年寄りとの交流は、観光の面でも地域を知るという面でも非常に重要であると思います。口承ではなく、耳にすることで

深まり、それを知った子どもたちが就職して外に出たときに、出身はどこ？と訊かれる。どんなところ？と訊かれたときに、魅力を知っていると伝わり方が全然違う。そういう活動をしていくと、村民ひとりひとりが営業マンになっていくことにつながります。私は栄村の志久見というところの出身で、私が住んでいるところは、昔は下高井郡だったんです。志久見古道いう道でつながっているということで、木島平村に来たのも縁があったのかなと思っています。

是非、お年寄りの知識と若者のチャレンジ精神が、違った知見でいい発信ができていけばいいと思います。

岸…こんなことがあります。社会福祉協議会の職員さんで、赴任したときにボランティア組織が全然なくて、中山間地の小さな学校なんです。学校に呼び掛けて、お年寄りの家に民生委員の方と伺って、いろいろ課題を聞いたんです。一番多かったのは“話がしたい”ということでした。それが中学生だったら、なお嬉しいという話があって、ただ話し合うだけの交流が始まったんです。そしたら、村全体が活性化して交流ボランティアという組織までできるようになったんです。ですからお年寄りの価値というのを子どもたちは案外、新鮮に見つけたりします。是非、推進していただけたらと思います。

小国…今日この時間が勉強になると聞かせてもらいました。よく言われていると思いますが、経済成長を前提としたような社会のつくり方から、持続可能な社会にどう転換するのか、潜在するテーマだったと思いました。観光化という言葉が、たくさん人が来てもらう前提だとしたら、人口は減っているし他の地域にも観光をやっているところがたくさんあるわけです。村の中で人と人が出会い直すきっかけとして観光化が大事な要素なんだと考えると、限りなく可能性があると思います。そのあたりの発想の転換がいま起こり始めている気がしました。

そのことが一つです。そうなったときに、お年寄りと話をするだけで地域活性化になるという出会い直し。その時に、面白いと思ったのは、高校が一つの核になる可能性があるということ、下高井農林高校は、いろいろな動物や作物があって、外から行くとミニテーマパークのような感じでした。村中でも動物を飼っている家庭がおそらくあるだろうから、下高井農林高校へ子どもたちが出かけて行って、さまざまな最新の知識に触れる。帰ってくると、自分の生活の中

で触れ合っている動物との関係が変わってくる。改めてよさに気づき直すという、下高井農林高校が地元の文化を見直す契機になりうる側面と、習熟した高校生がいることの魅力、大人から教わるということも大事なんですが、意外に欠けているのは、岸さんがよく言われるような「ななめの関係」、少し年上だったり、必ずしも上下関係のない人たちから学ぶという関係は非常に大事だと思うんです。

下高井農林高校は、普通高校ではなくて専門高校なので、木島平村の農の文化を基本にしている非常に成熟した可能性を持っていると思います。地域の小中学生にどれくらい開かれているのかわかりませんが、学びのフィールドとして開かれていると感じました。

今日議論になった継続性ということですが、継続しているからこそ発展がある。そういうことが起きている。もう一つは、カリキュラムとして作られているということが大きい。時間枠があるからこそ、今年は何をしようかという工夫になっていく。これがマンネリになってしまっているとつまらなくなったり、不安になったりしてしまう。そこに地域の人の思いや中学生や高校生、小学生のやりたいことが盛り込まれる余地があるカリキュラムにすることが大事になっていく。

やることをやりっぱなしではなく、それにかかわってくれる大人や高校生が居て、議論しながら事業をつくっていく契機があること、そしてコミュニティ・スクールの地域の人たちとの思いや意思を反映させられる余地が大事なんだろう感じました。日墓村長の話の中でも発信のことが重要だと話されていました。

学校関係者の意識としては、未来塾を重要視しているがカリキュラムの時間はわずかであり、学習指導要領があるなかでは、いかんともしがたいところはある。1日5分に満たなくても、常日頃から、保護者や子どもたち、地域の人たちに、学校として大事にしているというメッセージが共有されていると、たとえ時間が短くても、自分たちはこういうことで成長している学校なんだという、スクールイメージを書き換えていけると、改めて教えてもらいました。

岸…木島平村のグランドデザインで、CSの中におひさま保育園も入っている。改めてこの価値を考えたい。感じていただきたい。少子化の中で、家庭科の選択保育（保育実習）で、いきなり何かをするのではなく、中学生が社会教育の

おばちゃんたちに読み聞かせ技術を学ぶ、学んだ絵本をもって保育園に行って、中学生が抱っこしながら読み聞かせるということもできる。保育園と小学校、保育園と中学校、保育園と農林高校、カリキュラムの中に是非入れたい。必ず教科の中に可能なものがあるので考えていただきたい。

子どもたちからするとナイスモデルが、自分の身近にあるという価値。昔はそれほど考えなかったのですが、「あのお兄ちゃんみたいに上手にお神輿担ぎたい」「あのお姉ちゃんみたいにかわいく結いたい」と刺激を受けて、みんなから尊重される社会人に向かっていく。

そのためにナイスモデルが身近にいるということ、その価値がもうすでに木島平村にはあるということを知りました。大いにCSの今までの方向を確認しつつさらに追及してほしいと思いました。

関…はじめてのリモートで不手際が多くありましたが、岸さんの名司会で内容の濃いディスカッションになりました。

渡辺会長…CSではコミュニケーション能力の必要性など感じました。来年は是非、熟議も取り入れて開催したいと思いました。本日は、ありがとうございました。